

平成27年度第3回越谷市総合教育会議

日 時 平成28年2月12日(金)

15:00～16:45

会 場 越谷市役所第三庁舎5階 第10会議室

次 第

1 開 会

2 協議事項

(1) 第2期越谷市教育振興基本計画について

(2) その他

3 閉 会

出 席 者

市 長 高 橋 努

教育委員会

委員長 住 田 俊

委員長職務代理者 堀 川 智 子

委員 進 藤 秀 子

委員 荒 木 明 子

教育長 吉 田 茂

欠 席 者 な し

会議に出席した者の職氏名

【教育総務部】

教育総務部長 横 川 清

教育総務課長 山 梨 一 弘

教育総務課副課長 中 村 則 行

【学校教育部】

学校教育部長 野 口 久 男

【市長公室】

秘書課長 浅 見 修一郎

秘書課副課長 小 宮 崇

○高橋市長 それでは、定刻になりましたので、これより第3回総合教育会議を開催いたします。

本日の総合教育会議につきましては、予定どおり非公開とすべき事項は今のところはありませんので、全て公開とし、また傍聴につきましても許可したいと思いますのですが、よろしいでしょうか。

〔「はい」と言う人あり〕

○高橋市長 それでは、本日の会議は全て公開とします。また、傍聴も許可したいと存じますが、傍聴の方はおりますか。

○事務局 本日は、傍聴人はございません。

○高橋市長 では、これから平成27年度第3回総合教育会議を始めさせていただきます。

これまで同様、十分に協議調整を行ってまいりたいと考えておりますので、よろしくお願いいたします。

協議事項（1）、第2期越谷市教育振興基本計画についてでございます。

前回の会議では、計画の位置づけ、これまでの経過について事務局から、また計画の主な内容について教育委員会からそれぞれ説明を受けました。なお、同基本計画については、本日の会議の後、正式に決定するスケジュールとなっております。

それでは、本日の協議内容について、事務局、教育委員会からそれぞれ説明をお願いします。

○事務局 第2期越谷市教育振興基本計画案についてご説明申し上げます。

初めに、本計画の位置づけやこれまでの経過などについてご説明いたします。

平成27年4月から施行された「地方教育行政の組織及び運営に関する法律の一部を改正する法律」に基づきまして、市長は、「教育、学術及び文化の振興に関する総合的な施策の大綱」を定めるものとされました。これを受け、平成27年4月10日に開催された第1回総合教育会議において、「教育に関する大綱」についてもご協議いただいた上で、法律の趣旨にのっとり、越谷市では「教育振興基本計画」をもって「教育に関する大綱」とすることを決定いただきました。

その後、庁内の会議等において段階的に協議を重ねながら計画の素案を作成し、前回、平成27年11月16日に開催された第2回総合教育会議におきましては、計画の素案をもとに市長及び教育委員の皆様には、それぞれの立場から教育に対する思いや日々の活動を通して感じていることなどを述べていただきました。

私のほうからは以上でございます。

○教育委員会 それでは、今事務局のほうから第2回の総合教育会議までの経過等につい

てご説明いただきましたので、教育委員会のほうからその後の経過をご説明させていただきます。

11月18日から12月17日までの1カ月間、計画素案につきましてパブリックコメントを実施し、別添資料1になりますが、市民の方から合計27件のご意見をいただいたほか、1月には別添資料2になりますが、教育委員会が所管する12の審議会等の委員の方々から合計42件のご意見をいただきました。パブリックコメントにおきましては、教育相談の充実に関するご意見や教職員の資質向上、健康管理に関する意見など、子どもたちが学校で安心して学べる環境をつくってほしいという願いを込めたご意見が多くありました。

また、各審議会の委員さんからは、専門的な立場から、市民がもっとボランティアに参加しやすいような情報提供の工夫や各種学級講座の充実及び図書館機能の充実など、誰もが身近な場所で学べるような環境づくりに関するご意見を多くいただきました。

これらの教育に対する思いやご意見は、基本理念や各取り組みに全て含まれておりますので、一部記述をわかりやすく修正したほかは、大きな内容の変更を必要とするものはございませんでした。

ご意見の内容や対応についての詳細は、資料をご参照いただきたいと思います。本計画は、市民の方や教育関係者の意見を十分に取り入れた計画となったと考えております。

本日は、本計画案の最終的な確認という意味を含めまして、ご協議いただきますようよろしくお願いいたします。

それでは、計画案の特に主要な部分についてご説明いたします。恐れ入りますが、計画案、こちらの冊子をご覧ください。2ページをお開きください。2ページから4ページまでは、第1章「はじめに」として、計画策定の趣旨や位置づけ、計画期間などの基本的な事項について記述しております。

4ページの計画期間一覧表の中段やや下にございますとおり、今回策定する第2期計画は、10年間を見据えて策定した第1期計画に引き続いての、後期5年間の計画という位置づけとしております。

次に、5ページからございます。第2章「基本理念・基本目標」として、第1期計画に引き続いての後期5年間の計画ということで、基本理念につきましては第1期計画に引き続き「生涯学習社会の実現をめざして」といたしました。

また、6ページになりますが、基本理念にもございます生涯学習社会を実現するための3つの視点、さらには7ページになりますが、その3つの視点を確立するための3つ

の基本目標として、学校教育、生涯学習、生涯スポーツのそれぞれの分野における基本目標を掲げました。

次に、12ページをご覧ください。第4章「越谷市の教育の特徴」といたしまして、これまで積み重ねてきた成果とこれからの課題を見直す中で、改めて他市に比べ越谷市の教育が誇れるような特徴は何かということについて考え、アピールしたい取り組みや教育施設について挙げております。

続きまして、15ページになりますが、第5章「取り組みにおける成果と課題～第1期計画の検証～」といたしまして、第2期計画で取り組むべき教育施策を定めるに当たりまして、第1期計画の成果・進捗を踏まえたものとするためまとめたものでございます。

中段やや下でございますとおり、まず(1)、これまでの取り組みの成果として、第1期計画で重点的に取り組むこととした施策を中心に、これまでに取り組んできた成果について整理するとともに、(2)、重点事業指標の進捗状況といたしまして、第1期計画で設定した重点事業指標の目標値に対する現在の進捗状況を踏まえた上で、(3)、今後の課題といたしまして、各施策の方向ごとに今後対応すべき課題について明らかにいたしました。ここで取り上げた課題につきましては、第2編の各論の中で取り組みを明記し、第2期計画においてしっかりと対応していくとともに、できる限り数値指標などの目標値を設定した上で、毎年度進捗管理を行ってまいります。

16ページ以降32ページまでは、学校教育、生涯学習、生涯スポーツの各分野、各施策の方向ごとに同様の形で第1期計画の検証内容をまとめてございます。

34ページをご覧ください。第2計画において取り組む各施策、主な取り組みの詳細をまとめた第2編、各論でございます。第1編、総論、第5章、第1期計画の検証において挙げた現状の課題を踏まえ、今後5年間で取り組む内容について、42ページから81ページまで学校教育、生涯学習、生涯スポーツの各基本目標、各施策の方向、それぞれ施策ごとに主な取り組みを記述してございます。

続きまして、第3編、まとめでございますが、87ページの中表紙、続いて88ページをご覧ください。第1章で計画の推進といたしまして、今後5年間の計画を推進していくに当たっての基本的な考え方を、また89ページになりますが、計画の進行管理、点検評価として第1期計画と同様に、PDCAのマネジメントサイクルに基づき計画の進行管理をしっかりと行うことにより、市民への説明責任を果たしていく旨記述しております。

第2期越谷市教育振興基本計画案についての説明は以上でございます。ご協議のほどよろしくお願いいたします。

○高橋市長 ただいま説明がありましたけれども、この件につきましてそれぞれ何かござ

いましたらご意見を出していただければと思います。

これを細かく見ていけばあるのでしょうかけれども、第1期目で取り組んできて2期目に入るわけですがけれども、第1期目で取り決めなかったというか、まだ十分でないというようなものはどんな点があるのでしょうか。

教育長、どうですか。

- 吉田教育長 先ほど説明があったように、10年先を見越した上でのこの第2期目ということで、基本理念であるとか3つの視点、3つの基本目標、10の施策の方向については変わりはないわけですが、例えば2ページ目になりますが、ICTの活用についてですが、子どもたちの生活の中にこういう例えばパソコンであるとかスマホであるとかタブレットの端末であるとか、情報機器がかなり入り込んでいることもあり、国のほうでも推進計画がつくられております。また、情報機器の開発やデジタル開発が進んでおりますので、ICTを活用した教育については継続して取り組んでいきたいというふうに考えておるところでございます。

あわせて、大学であるとか、あるいは自主サークルのようなものがございまして、そういったところとも連携をして、どういった教育効果を上げることができるのか、あるいはどういった活用の方法があるのか、これについても実践研究をしていきたいというふうに考えておるところです。

また、学校についても、教育委員会で持っているところのタブレット端末などを貸し出して、そういう研究実践を進めていきたいと考えておるところです。

あわせて、そういう情報機器については光と影がございましてけれども、情報モラル教育についても昨今取り上げられておるところでございますので、こういったことについてもあわせて進めていきたいと考えておるところでございます。

- 事務局 この後、協議事項にもありますので。

- 吉田教育長 これから協議するのですね。先に言ってしまいました。その進行に沿って、今のお話をさせていただきたいということです。済みませんでした。

- 高橋市長 いろいろやらなければならないことがいっぱいあると思うのですが、この教育振興基本計画が後期へ入っていくに当たって、これを作るに当たって、1期目の前期の取り組みをした中で、さらに後期として取り組んでいくべき課題といたしますか、そういったものがあつたら、少しお聞かせいただきたいと思っています。

- 吉田教育長 実際に計画を立て実践をするというところでは、教育行政方針とか重点施策にかかわってくることです。今、市長がお尋ねのところについては、この後説明する教育行政方針と大きく関わってきますので、まずその辺を進めていただければと今申し

上げて、私からは、また随時申し上げたいと思います。

- 事務局 少し事務局のほうから説明させていただきます。今、教育長がおっしゃったとおり、教育行政方針の中で、平成28年度の施策について掲げており、当然こちらの第2期振興基本計画の案の中に、具体的に言いますと、19ページ、基本目標1、2、3と分かれていますのですが、今後の課題、先ほど少し説明させていただきましたが、今まで1期の取り組みの成果、それを検証いたしまして、指標の進捗状況を踏まえて、18ページでそれを検証し、19ページの計画の中の今後の課題として挙げさせていただき、その課題について、個々の各論で、10年間を見据えた5年間、第2期の後期で課題について取り組みをより一層していくということで、計画のほうで整理をさせていただいているところです。

事務局のほうから続けて……

- 高橋市長 はい、事務局。

- 事務局 例えばですけれども、計画の中で16、17ページを開いていただきますと、先ほど教育長のほうからお話がありましたように、ICTにつきまして、16ページの中で最初に成果を捉えて、それに対する課題として17ページの(3)で1つ目の課題として記述しておりますが、これまでも取り組んできたのですけれども、指標等についてもう一度見直して実態の把握をきちっと行い、教職員のICTに関する指導力の向上が課題であることを明確にいたしまして、そしてさらに43ページで、ICTを活用した教育の充実という具体的な主な取り組みとして挙げております。

以上でございます。

- 高橋市長 こういう計画は誠によく作ってあるのだよ。本当に、微に入り細にわたって作ってある。この目次を見ればそのとおり、取り組みにおける成果と課題ということで基本目標1、基本目標2、基本目標3における、政策の方向を書いて、今後の課題ということで、みんなきちっと整備をされているのだよね。だから、それについて一々言うものはないわけです。というのは教育は幅広いから、その中でも大きな重点というか、今後の越谷市としての教育としてどういうふうな方向に持っていく必要があるのか、一番念頭にあるのが何だろうかということをし口にしたかったわけです。計画は、まことにみんな作るのが上手なのだよ。これに限らずいろんな計画は、本当によく書いてある。しかし、計画は書いてあるけれども、なかなかその実現が難しいわけだよ。いざ実行していくということになると、大きな現実的な課題が横たわっているわけだよ。だから、横たわっている課題をどう取り組むかで1年や2年すぐ過ぎてしまう。なかなか取り組んでも十分には当初の目的どおり、ここに書いてあるようには、実現し得ないとい

うのが現実なのだよね。そういう中で今、率直に見たときに、越谷の教育の課題というのは何だろうか、そういったことを挙げ、大きな展望を持ちながら、それぞれの担当の職員がみんなその課題ごとに追求して、日ごろから取り組んでおられるのは十分わかるわけです。

- 吉田教育長 大きなくくりでの課題とか目標とかというのは、前回お話をさせてもらったのですけれども、ここで言うと6ページ、7ページになりますが、ここに掲げていることは、別に絵に描いた餅、あるいは理想だけではなくて、やはりこうした目標に沿って、あるいはそれを実現するための視点というようなことで3つの視点を挙げさせてもらっていますけれども、やはりこれを目標に施策を組んで、個別の主な取り組みを進めていく中で、目標を達成するために、常にそこにかかわりながらやっていくというのが一つのPDCAのサイクルに基づくマネジメントというふうになると思うのです。ですから、職員に実際に話していくときは、絶えずこの基本目標あるいは10の施策の方向に沿って、どれほど達成できているか、その進捗を見極めながら、あるいは時にはその取り組みの内容を精査しながらやっていきたいと思いますということで話をさせてもらっているのです。
- 高橋市長 私なんかは、こういうふうに書いてあることはごもっともだし、やっていかなくてはいけないことだけれども、それを具体的に進めていくのは、前にも言ったかもしれないけれども、学校長以下教員がそれぞれしっかりと理解をして、やはり方針に沿ってきちっと子どもに接し、教育していくかということになるわけだから、やはり再三言っているかもしれないけれども、校長だとか教職員がその指導体制、指導力を高めるための取り組みが一にも二にも大事だということで、私は捉えているからこそ、細かいことについて私は云々言うつもりはないのです。
- 吉田教育長 実際に、ではどうやって教員の指導力の向上を図っていくのか、あるいは子どもたちの学力、学びを支えていくのかということになると、どうしても各論で説明しないと、これは大きなくくりで言うと難しいのです。ですから、いきなりこのICTの活用に触れたのですが、例えばICTをいきなり進めようと言っても、年配の先生方にしてみれば、リテラシー、いわゆる活用能力というものも、それを使って授業を進めていく指導力がついていない人もいますし、それを使うこと自体に少し拒否反応を起こす方もいらっしゃいます。ではそういう方に対してどうしましょうかということ、要望があれば指導主事が出向いて直接指導しますよと、出前研修を行っているのですけれども、実際にこういう目標を掲げたときに、現場とのギャップは当然生じるわけです。それを埋める具体的な手だてを絶えず講じながら、実際には進めているというのが現状です。

例えば、学力の向上とか中1ギャップの解消とか自己肯定感の高揚、小中一貫教育については掲げているわけですが、しかし実際に現場におりたときに、小学校と中学校の間でどれだけ交流できるかと言ったら、これはいろいろな難しい問題があるので、そういう問題についてもこちらではこういうふうにやっていったら可能ですよねとか、あるいは具体的にこういうふうに取り組むといいですよというようなことを絶えず検証しながら、それから現場に合わせて指導しながら進めていっておりますので、いずれにしてもその目標を達成するためには、かなり用意周到な具体的な策を講じていかないとなかなかうまくいかないということですので、その辺の説明になると少し個別具体的にならざるを得ないということになってきますので、この施策、教育行政方針に基づいて今言ったようなことをお答えすることが答えにつながるかなというふうに思っているのです。

○高橋市長 小中一貫教育とか中1ギャップとか、そういったものは制度的には多いというのは問題があるのだろう。だって、小学校30校、中学校15校、当然2校に1校単純計算になるわけでしょう。そのときにまた児童生徒の構成も違うから、当然今の状態からいったら、何か制度的なものは棚に上げて、中1ギャップだということ論じて、これを何とかしろというのは、かなり難しい課題なのだよ。

○吉田教育長 そうですね。

○高橋市長 小学校の場合は学年単位制で中学校は教科単位制でしょう。そうすると、そういう指導体制も違って来るから、そのギャップと言われるものをどう解消していくかというのは、これはギャップだと言っているほうにも少し無理があると思うのだけれども。

○吉田教育長 今度は、学校教育法で、義務教育学校というのをつくったのです。これは小中一貫学校と言ってしまうと、何か統廃合に結びつくから嫌だと言って、義務教育学校という名称でやっているのですけれども、そういう中で例えば校長1人にするとか、あるいは教科担任制とか、いわゆる免許を小学校、中学校両方とも免許を持った先生がそこに当たるとか、制度設計を、小中一貫教育学校というのはこういうものだよというのを、法律として今定めておりますので、実際に小学校と中学校の違いがあって当然ギャップが生じてしまっている部分もあるので、そういう制度を直してからというふうに言っていると、また現実に対応し切れなくなってしまうので、そういう矛盾を抱えながらもやはり9年間見通して教育を進めたほうがどうやったって効率的になるわけですので、その辺今の時点の中でどういうことが可能かを模索しながらやらないと、当然教員にも負担を感じさせてしまいますので、そのようなことを配慮しながら、

ここまではできるだろうという形で取り組んでいるということなのです。ですので、教育委員会で無理やりやっていくのではなくて、むしろ私はもう少し待ったほうがいいのかなど思っていたのですけれども、現場のほうでやろうではないかという動きがあって、今回、市内の中学校を中心に15のブロックに分けて、市内一斉に共通の目標を持って小中一貫教育をスタートさせたというところですので、いわゆるモチベーションを持ちつつ、こういう研究を進めていっているなというふうには、少し手前みそですけれども、思いながら進めているのです。

- 学校教育部長 小中一貫教育については、市長さんおっしゃるとおり制度的な違いの中での子どもたちの感じるギャップをできるだけ解消しようということでは今取り組んでいるところでして、例えば今の計画で言いますと、44ページになりますが、指導内容とか指導方法の改善ということで小中一貫教育の指定による研究指定とかを進めることによって、ギャップ等を解消していこうということで、実際に中学校へ行くと不登校生徒の数が増えるとかということも現実としてかなり顕著に出ていますので、できるだけこの教育を進めることによって、子どもたちの充実した中学校生活にもつながればいなということ、常々思っているところです。ですから、研究のための研究にならないようにということ、いつも先生方のほうに、学校を通して伝えながら進めているという状況でございます。

以上です。

- 吉田教育長 実際に今求められている学力の一つに思考力とか判断力とか表現力とかというのが求められていますけれども、それが小学校6年間で積み上げてきたものが、そのままスムーズに中学校の3年間に橋渡しができるかということ、意外と小学校ではどんな取り組みをしていたか、あるいは逆に言うと中学校ではどんな取り組みをするのか、教員同士が知らないということがあるのです。そうすると、知らないままその小学校で積み上げてきたものを中学校にスムーズに移行できるかということそうもいかないので、まず最初は小学校で何やっているのか、中学校で何をやっているのかということを知ろうという、それが小中一貫教育の最初の取り組みになって、今年1年合同で研修をしたり、中学校の先生が小学校に行って授業をやったりというような取り組みをしていて、実際に発表したときも同じ中学校の中で小学校の教員が授業をやり、中学校の教員も小学生を相手に授業をやり、それをその学区だけではないのですけれども、市内の先生方が来て見るというような取り組みをしたところなのです。

ということで、現実的な小学校、中学校の違いがある中で、では何ができるのかということを中心に9年間を見通した連続性のある系統的な指導をこれから研究していこう

ではないかということでスタートしたということなのですからけれども、これがやはりやっ
ていかなければいけないというふうに強く感じております。実際にやったところの先
進的な地域の事例も十分に研究をさせてもらう中で、しかもさっき言ったように現場か
らの声でやりましょうよというような話がある中で進めてきたものですので、効果は上
げられるのかなというふうに思っているところです。

○高橋市長 先生の小学校の教育のあり方と中学校の教育のあり方というのを知らないとい
うことは問題だから、やはり小学校だと、これはさっきも言ったように学年単位で担
任制でやっているし、中学校へ行けば教科制になるから違うのだよというのは、小学校
の6年生のときに大体教えるよね。中学校へ行くと、今度は科目ごとの先生になるのだ
よと、クラブ活動も活発にやっているとか、早くそれに慣れてやりましょうというよう
なことを教えてきているわけだけれども、それがなかなか今いろいろ言われているよう
なギャップだということで、不登校につながるというようなことが顕著にあらわれたか
らということが、私はまだそれほど、言うほどにあらわれているのかなと思う気もある
のだけれども。

○吉田教育長 中1ギャップは、徐々に積み重なってきたものなので、小学校から中学校
に行ったときに、そういう制度が変わるから急に増えるとかということではなくて、そ
れは継続していく中で増えていくものなのであって、実際には中1ギャップがないのだ
って難しい言い方をする人はいるのですけれども、例えば実際に不登校の数が小学校6
年生までの間と中1から中3まであって、かなり差がつく、急に伸びるのです。その辺
はなぜなのだろうというようなことを踏まえて、同一歩調でその生徒指導をやってい
こうではないかとか、あるいは教科担任制があるのであれば、小学校の5、6年生になる
ところで教科担任制をやってみようではないかとか、そういったようないろいろな取り
組みを今後研究していこうということでスタートさせたということです。

中1ギャップの中で何が一番違うのだと言ったときに、やはりこれも年齢によってそ
ういうふうになってくるのだと思うのですが、自己肯定感が小学校1年生から中学校3
年生までと、これが右肩に上がるのではなくて右肩下がりだと、やはりいろんなことを
自分なりに理解していくから、どうしても今までは自分は将来もあるのだとかという考
え方よりも自己を否定するような考え方が増えていく。そういうこともあわせてこの自
己肯定感を上げていく、あるいは現状維持にするためにはどうしたらいいのだろうかとい
うようなこともあわせて取り組むということで、一つの目標の中に自己肯定感の高揚と
いうことを入れて取り組んでいるところです。これはまだ5年間かけてやりましょうと
いって、まだスタートラインに立ったばかりですので、まだまだ詰めていかなければい

けないこともたくさんありますので、この辺のモチベーションをどうやって今後続けていながら研究を進めていってもらおうかというのが教育委員会としては大きな課題ということになります。

○高橋市長 この前、梶田先生の一番最初の質問ではないけれども、ニュートリノは、どういうふうに私たちの生活の中で役に立つのかという質問がありました。

○吉田教育長 何に役立つのですかと。

○高橋市長 単純な質問だったけれども、あれは梶田先生も困ったのではないかと。役に立つことはありませんねと答えていました。あとは中学までは何となく過ごしてしまったという答えもあったでしょう。それが大体普通の子なのだよね。だから、私は逆に、ノーベル賞をもらうような人が小学校のときはそういう考えだったのだなと。だけれどもあれだけの得体の知れない、理解できないような世界に入って、ノーベル賞をもらうまで打ち込んでいったと。苦勞を苦勞とは思わないという認識でしょう。あれだけ達観するような人間に育っていくわけだから、余り深く考えることもないなと。高校、大学ときは弓を引いていましたと言っていましたけれども、ああいうのを聞くと、一面安心したような気がするのだけれども、安心してばかりいられないのだよね。中学生の多くは、本当に目標を持って一生懸命やっているのだろうか。勉強が嫌いな子に勉強をやれやれと言ったって、勉強をやらないわけ、だからそういうところから教科制になると、はっきりと分かれていくから、一生懸命ついていける人はいいのだけれども、マラソンや駅伝ではないけれども、他の人がレースでやっていて少しついていくのが外れると、もうそこでがたと落ちてしまうような、そういう状況になるのだろうかと思う。

だから、これからの教育というか、今までもそうだったのだろうかと思うのだけれども、やはり中学生の人生観とか、勉強の目的意識だとか、これが非常に私は薄れているのではないかなという、またそここのところに先生方がやはり個人の個性を見出して、早くから、中学から美術の得意な人だったら、「あなたは美術は優秀だね」ということでどんどん褒めて進めるとか、体育だとかスポーツが得意な人には、「あなたはすごいね」ということで褒めていくとか、何かそういう具体的な取り組み方、教育の仕方というのを考えていかなくはいけないのではないかと、私はいつも思っています。

今、中学生が一番不満なのは遊ぶところがないことだ。勉強の好きな人は朝から晩まで勉強を一生懸命やっているかもしれない。だから、優秀な子ができると思うのだよね。そうでない子は、遊ぶ場所もない、遊び方もわからない、そのうちに何人か同じような人が集まって悪さを始めるというのが現実的な今の中学生だろうと思うのだよね。

スポーツクラブだの何もやっていない子はどういうふうに暮らしているのだろうか、

私はいつもそのところは疑問に感じている。だから、こういう子どもたちもどういうふうに教育の中に取り組んでいったらいいのだろうかというのが私は大きな課題ではないかなと。

それと、中学になってだんだんと落ち込んだりマイナス思考になってしまう生徒は、結局目標を持たないで、精神的に追いつめられてしまう。情報は氾濫しているわけだから、いろんな情報に振り回されて、どれが自分の意に沿ったのか、目標なのかわからないで、もうその場主義でずっと押し流されていってしまうようなことも多いと思うのだよね。そこをどうやって早くから目的意識を持つような教育をしていくかというのが大きな課題なのではないかなと思っているのだけれども、同時にそれは非常に難しい話だとも思っている。

○吉田教育長 これは、自己肯定感の高揚というのは、今市長さんがおっしゃったような、要するに自分が授業中に他人の役に立っていると思ったことがありますかとか、授業中でもそうですし、学級経営でも。あるいは自分が人からあなたは学級にいていい存在ですよというふうに思われているかとか、具体的なアンケートをとる中で、子どもたちが今どのような状況にあるのか、学級とか授業中に、そこから得られた児童生徒の実態をつかまえて、もう少し学級経営を改善していこうよと、あるいは授業の指導の方法を変えていこうよとかということに至らないと、自己肯定感というのは高まっていきませんよねということで指導しているの、切り口としては同じだなというふうには思っているのですけれども、この辺私としては一番やってもらいたいところなのです。

どっちかというところに頼ったり知育偏重でやっているところがまだ見受けられるところもありますので、実際に子どもが今どういうふうな状況で授業を受けているのか、クラスの中にいるのか、それをしっかりと見極めた上で、それに基づいて授業を改善していきましょう、学級の経営を改善していきましょうという視点で取り組んでいっているところなのですけれども、その辺は繰り返し言っているのだから伝わっているとは思いません。単に自己肯定感の高揚と言って、交流だけやっておしまいにしてほしいと、必ず授業改善、学級経営改善につなげていってほしいという話をしているところです。

意外とそういう視点で学級経営や授業改善を進めているというのは、今までないわけではないのですけれども、そこに意識してやっているというのは、個々にはあるのですけれども、学校全体で取り組むということは少なかったように思うのです。だから、これを3つの狙いとして進めていくというのは、割と画期的な取り組みかなというふうに思っているのですけれども、これがさっき言ったように絵に描いた餅ではなくて、本当に教員の日々の指導に生きて指導が変わってくるといいなというふうに思っているの、

そこに焦点を当てて指導しております。このあたりはやっているのだよね。

○学校教育部長 はい。

○吉田教育長 生徒指導の出前もやっているのだろう。

○学校教育部長 はい。学級経営なんかもやはり小学校と中学校で少し、担任と一緒にずっとしているのが小学校で、中学校は教科ごとに変わったりするので、それぞれのよさもあるのですけれども、それぞれのまたデメリットもあるということで、お互いにそのメリットとデメリットをうまくいいところを取り入れながらやっていけば、きっと子どもたちもいいのではないかなということは考えております。

特に中学校ですと、今日も校長先生から話す機会があったのですけれども、小学校なんかでよく善行賞みたいなことで、いいことすると賞状をもらえるとかということがあるのですけれども、そういうことをやると子どもは喜んでいるのですよという話も聞きました。やはり大きくなってもそういったことを認めてもらうと非常にやる気が出るのだということも聞いたりしていますので、お互いの取り組みの中で取り入れられるものがあれば取り入れていくということは、非常に大事かなというふうに思っています。

その他、部活動、恐らく市長さんがおっしゃっていたように、部活動で活躍したり、目標を持っているお子さん、勉強で目標を持っているお子さん、その中で少なからず目標を持ちにくくなったお子さんにどうするかということはやはりこれから焦点になっていくと思いますので、その辺のノウハウについてはやはり小学校の教員なんかで結構声かけするということもかなりできるのですけれども、中学校ではなかなか難しい部分もあるかもしれませんので、そのあたりの子どもの接し方とか、休憩のあり方とかということについては、交流を進める中で解消できればいいなというふうに思っています。

この前の梶田先生のお話ですと、普通の子どもたちは、なかなか自分は何が得意か言えなかった子どもたちも、ああいう話を聞くと、自分もちゃんとしていればそういうこともあるかなということで、少し希望のあるような話を聞けたと私も思い、私自身もそんなに特徴あって何か活躍したということはないので、今のお子さんなかなかそういう、少子化の時代に生まれたというのもあるのかもしれませんが、昔のお子さんと少し違いが出てきているのかなと、それにも我々は対応しなくてはいけないかなというふうには思っております。以上でございます。

○吉田教育長 梶田先生のあの講義を聞いていて、役に立たないというそこだけ取り上げて、役に立たないのに何であんな研究の話をやらせたのか、そういうふうに言っていた方もいらっしゃいましたけれども、そういうとり方もされるのですよというのを校長会で言って、さっきも市長さんもおっしゃったような、子どもたちは逆に安心したのでは

ないか、ああいうことを聞いて、むしろそのほうが子どもたちにとっては、どっちが意欲的になるかといったら、難しい話を聞いているよりも役に立たないのだから、中学校の時代そんなにやっていなかったけれども、俺もこうやってやれたのだからという話を聞いたほうが、ずっと意欲的に取り組むのだと、そういう意味で校長先生方にはあの話をフォローしてくれというふうには頼んだところなのですからけれども、全てそういう視点で子ども一人ひとりに焦点を当てて、授業改善、学級経営改善に取り組みましょうというのは小中一貫教育の9カ年やっていきましょうよという取り組みの狙いでもあるというふうには思っているのですけれども、そういう方向で絶えず話をさせてもらっているということなのです。

- 高橋市長　どんな小さなことでもいいから、自分がやってみたいというものを見出せるような教育というものを、先生が特徴をつかみ取ってくれるといいのだけれどもね。その具体例として全く帰宅部で何もやっていない子はどのくらいいるか、具体的に少し聞きたいのだけれども、そういう調査なんかはやったことあるかね。
- 学校教育部長　ある程度はあるとは思いますが、ただかなり多くのお子さんはほとんど部活は入っているのかなというふうには捉えています。部活も運動系と文化系があるので、どっちかというスポーツ系のほうが華やかな部分は確かにございます。ただ、文化系でも金管バンドとか伝統文化の踊りを発表するとかということで、少し発表の機会がいただけるような部分はあるのですけれども。
- 吉田教育長　実際には塾に行っている子もいるので、入らない子もいますし、あるいは部活に入らないけれども、シニアの野球であるとかサッカーに入っている子もいますので、一概に部活に入っていないから何もしていないというわけではないと思います。一応中学校のほうでは、全員加入でやりましょうと言っているけれども、しかし強制力はありませんので、嫌だと言われてしまえば仕方がないなという話になりますからね。
- 高橋市長　サッカーにしても野球にしても、クラブチームみたいに指導しているところもあります。だから、学校でやっていないからやっていないという決めつけはできないので、その辺になるとだんだんと調査も難しくなってきますよね、実態把握するのが。
- 吉田教育長　基本は、大体自己満足で終わるケースが多い、よくその辺を承知するのが、教員はこういう授業をやって、多分子どもたちはよくわかっただろう。しかし、実際に子どもたちにそのアンケートをとってみると、ギャップがあるのです。例えば教員は80%これはわかったと、しかし子どもにしてみれば60%しかわかっていない、こういうのはよくあるので、絶えず子どもにも評価してもらって、それから自分もその授業を評価して、自己肯定感の高揚、どこまでそういう高揚が図られているかをきちんと子どもにア

ンケートをとって、それをもとに、あるいはそれを指標にして授業改善とか学級経営改善に努めましょう。あわせてそこを言っているところなので、単に学力向上だけで取り組んでいるわけではない。

- 高橋市長 あと、今の話の延長だけれども、中学の場合は教科中心だよな。担任もいるよね。担任の役割というのはどうなのだろう。
- 学校教育部長 担任は、小学校の担任と接し方は違いますけれども、学校行事とかで、中学校の場合は特に音楽会ですとか体育祭ですとかそういうことでクラスの団結力なんかを高めているというのがほとんどかなという、日々の生活の中で朝の会とか帰りの会できちんと指導しながら、みんなの仲間意識を高めていくということをやっているのが中学校の実態かなというふうに思っていますので、クラス担任ということについての自覚というのはやはり中学校、小学校の教員でやはりしっかり持っているというふうに捉えております。
- 高橋市長 だから、クラスの担任の先生が自分のクラスの子どもたちの構成というのは、それなりに把握しているはずなのだよな。また、把握してくれなくては困るのだよな。単に出席をとるだけの担任ではないよね。だから、教科は教科の先生がいろんな評価とか教えたりするのだけれども、クラス担任というのは全体を束ねた、全体を見てやはりどの子は落ち着いていないとか、どの子は悩みを持っているなどかというのは、大体担任の先生が把握する形なのでしょう。
- 学校教育部長 そうです。教科の先生から例えば情報があって、担任の先生に少しあの子元気ないよとかというような情報があれば、また担任のほうで相談するとかという学校の中で組織的に取り組めるようにということは各学校でやっております。
- 高橋市長 それはやっているの。
- 学校教育部長 はい。あと何か問題が起こったときにも、いわゆるある教科で叱った場合は、別の担任がフォローするとかというそういった連携で子どもたちを育てていくということが中学校のやり方かなと思います。
- 高橋市長 具体的には、要注意の時点で先生でもそれは対応できるわけだよな。その場合には、やはり共通して理解して対応しないと、おさめるどころではなくて増幅してしまうのだよな。
- 学校教育部長 そうですね。やはりフォロー役と指導役とかとうまく連携しながらやっていく。小学校の場合は結構、私も担任の経験ありますけれども、やはり帰りまでにはフォローして帰してあげるとかというので、担任が1人でそういうことをやっている部分は小学校のほうはあります。少し強く叱ってしまったので、帰るまでには1回フォロ

一して、「おまえのこと好きだから指導したんだからな」なんて言いながら、次の日元氣に来てほしいと思って、意外と子どもはすぐ忘れてしまったりして、気にしていないこともありましたけれども、そんなふうに、中学の場合とその辺が少し、連携が中学の場合は必要になってきております。

○高橋市長 中学は、やはりいろんな問題が発生するのは精神的にも相当急成長するでしょう。だから、周りの情報なんかにも左右されるから、そういう点でも非常に難しいのだよな。だから、そういったことをやはり先生が前提条件としてちゃんと把握していないと、無理押ししたり、無視したり、そういうようなことになってしまう、そうでなくたって大なり小なり好きな先生と嫌いな先生とか、あるいは嫌いな教科とかできてしまうのだから、中学のときには大体が。それをいかになくして、みんな同じ方向に顔を向けてくれるかというのは難しいわけだからな。

○吉田教育長 そうなると学年経営というのですけれども、学年で同一歩調で学習とか生徒指導とか、あるいは当番活動みたいなものをしていきましょうよというので、ある程度取り決めをしながら学年で動いていくというやり方をするのですけれども、年齢構成がきちんとしていると、例えば若手がいて中堅がいてベテランがいるという、ところが役所も同じだと思うのですけれども、今は50代がたくさんいて、40代がいなくて、若手も今同じぐらいになってきてはいますので、どうも肝心な中堅がいないと、非常に学年構成がアンバランスだと、そこは今、一つ大きな課題になっているところです。

だから、ミドルリーダー研修会というのも盛んに行っているのですけれども、実際に組織を動かそうとしたときに、その中堅がいらないというのは、校長にとっては結構痛い状況もあります。どうやっているのと聞くと、直接その組織に行って、自分が指導しているのだと、校長は言っていますけれども。

○高橋市長 全てが当てはまるという。

大学は、対象が違うのだけれども、どうですか、先生。

○住田委員長 非常に最近は評価も甘くなっています。私どもも4年でもって卒業ができるというのは、大体、学部によって、大学によっても違いますけれども、私の出た学科では大体3分の1は途中でいなくなる、やめるか、落ちるかというぐらい、3分の2ぐらいしか4年で卒業できなかったですね。

最近は、現在私のいる大学が97%です。よほど長期の欠席がない限りはほとんど出てしまう。非常にもう落とすとなると、我々のころはもう可か不可かぐらいの話なのですけれども、非常に厳しく、たとえ1単位でもだめだといわれていますか、もう1点足りないやつはぼんぼん落としていったわけなのですけれども、最近は本当にまあまあといって、全

部拾い上げていって、非常に安易に卒業ができるというのは、あまり私はいいとは思わないのです。それがまた教員になりたがるので、基礎学力がないというのは、私は非常にもうお恥ずかしいことです。こんなのよく教員になるなど。ですから、教員採用試験のやり方を考えてもらいたい、というのが正直なところ。たとえば小学校の教員でも、少なくともどの教科も義務教育のレベルぐらいの実力を持った人間を採用してもらいたい。ところが、私は、高校のとき文系だったからとか、理系だから文系のことわかりません。文系だから全然こっちはわかりませんと、そういうのが小学校の教員になっている。ですから、特に理科の実験、全くできないのがなる。それでもずっとペーパー試験では行ってしまうわけです。それが非常に後々こちらのほうにご迷惑かけることになる。本当にひどいのがいるのです。

- 吉田教育長 なかなか難しく、やはり大学とか高校とかというのは、上級の学校だから、それなりの目的意識持って入ってもらわないと困るところだと思うのです。それなりに出た方は、それなりに評価されて出ていくが、公立の義務教育の小中学校は、勉強したくなくたって入ってきては、その子も面倒見ていかなくてはいけないわけですので、こういったところではかなり先生方は苦勞して取り組んでいる。だからこそ今みたいな取り組みが必要になってくるということになるのだろうと思うのです。

それは、教員の大変なことであると同時に、それが使命だろうというふうに考えているのですけれども、私立みたいに選んで入らせられるのならいいけれども。

- 高橋市長 義務教育は必ず卒業させなくてははいけない。落第させるなんていうことはないよな。高校、大学はそれできるわけだよな。

- 吉田教育長 できるのですよね。いろいろな事情で、委員長さんのお話聞くたびに大変な思いしているなと思っています。

- 高橋市長 文教大はレベルが上がったという話を聞きます。

- 住田委員長 きょうも判定会議やってきたのです。センター試験で、大体全体で7.5～7.6倍あったのだと思います。センターで7.5～7.6倍あるということは、かなりレベルは高くなっているなという気はするのですけれども、実質歩どまりがどうなるかなので、みんな他の大学にとられるかもしれません。

- 吉田教育長 極論になってしまいますけれども、好き嫌いというのはどうしても、合う、合わないというのがありますので出てくるのです。逆に言うと、そういう選んで、子どもが嫌いな先生に合わせるのではなくて、やはり嫌いは嫌いとして合わせてやっていくというつき合い方もやはり同時に覚えていかないと、世の中に実際に出たときに、合う人ばかりではありませんので、そういうふうを選択してつき合うということも大事ことな

のかなというふうには思っているのですけれども、

- 高橋市長 大人になれば反面教師だってことがわかる、ひどい親のところに優秀な子ができて、いや反面教師として親のまねしてはいかぬということでちゃんと勉強して、その辺の役割を果たして、社会人として生き抜いている人もたくさんいるわけだから。やはり両面をわかるように教えていかななくてはいけないのだけれども、教えるというよりもみずからが悟っていくような教育がないとだめなのだよ。やはり自分で感ずればどんどん進んでいくのだけれども、自分で感じないうちはなかなか思うように子どもの指導をするのができないし、わかるように教えることが難しい。先生もますます大変になってしまうのだから、現場の先生が特に非行少年に対応するには、よっぽど練られた先生ではないとなかなか更生もさせられないし、将来希望を持たせるようにはいかないと結果に終わってしまうのだけれども。
- 吉田教育長 中学校でよくやるのは、例えば問題行動を起こした子どもに対して厳しく接する先生と、どうしてそんなことすると、子どもの目線に立って歩み寄っていく先生両方つくります。そうでないと、一方的な指導だけだと、やはり子どもも反発を感じて、それ以上更生してくれないので、両面を備えてやれるのが一番なのですが、なかなかそういう人はいませんので、役割分担を決めてやるということもやります。
- 高橋市長 学校内におけるそういう役割分担が大事だな。
- 吉田教育長 さっき部長が言ったように、俺はこうやって言ってしまったのだけれども、少し聞いてくれますかねと、私はよく部長とやっているのですが、校長にがみがみ言った後フォローをしてもらうなど。
- 高橋市長 そういう弥次喜多ではないけれども、やはり言うやつ、かばうやつと両方がいないと、公平な感覚を持ち得ないまま終わってしまうからな。
- 吉田教育長 こういような感覚で学年経営を進めていくのだよというのは、それとなく先輩に教わってきたのですけれども、さっき言ったその年齢構成が少し若手とベテランと中堅がないという、この構成が一番気になっているところです。学校の校長先生だけにその辺の穴埋めをさせておくのは、やはり難しい状況なので、何とか教育委員会でもフォローしていかななくてはいけないと思っています。
- 高橋市長 堀川委員さんはどうですか。何かありますか。
- 堀川委員長職務代理者 今、具体的なお話がたくさん出た後で、この3つの視点をやはり見ておきますと、今中学校での具体的な先生方の指導というお話であったのですけれども、それ以外にやはり地域の力、家庭の親の力、それに加えて地域でやはりいかに子どもとかかわるか、自分の子どものかのころのことを考えると、大きな夢とか先のことを

考える、考えていなかった子どもかもしれませんけれども、何となく将来希望を持たせてくれたのは、親や地域の方たち、あるいは学校に行ったら学校の恩師だったり、そういう人たちが希望を持たせて夢を膨らませてくれたのかなという気がしております、越谷市、地域で子どもたちに夢を与えられるようなコミュニティができ上がっていけばいいなと、昨今大人のモラルの低下とかということもありますので、学校教育プラス市民でしっかり教育力を上げようという気持ちが高まればいいかなというふうには感じますし、その一員として何かお役に立つことがあればやっていきたいなとは感じているところです。

○高橋市長 学校教育では、週休2日制なんかのときには、地域のかかわりを大事にと、地域との児童生徒の対応、かかわりを進めなくてはいかぬと言うけれども、実際に進んでいるのだろうか。

○吉田教育長 実際に、あれですね。子ども会とかスポーツ少年団とかという組織があるのですけれども……

○高橋市長 今減っている。

○吉田教育長 だから、今それを言おうと思ったのです。減っているのです。確実に、スポーツ少年団は増えていると思うのですけれども、我々がやっていたころよりは格段に増えていますので、子ども会が減っています。

例えばあるところに、これはよく例として出すのですけれども、ある県外視察で行ったときに、ある市のお話を聞いたら、宿題が学力の良し悪しに大きく影響している、相関関係がありますよねという話を聞いて、本市ではどうですかと聞いたら、宿題をみんなやってくるのだという話を聞いて、どうしてそんなことになるのだからよくよく聞いてみると、その市は、小学生の段階では全部スポーツ少年団に入っているという話なのです。スポーツ少年団のリーダーになっている人が宿題やってこいと、やってこないスポーツ少年団に入れなぞと言ってくれているのです。そういう話なのです。

だから、やはりそういう学校も地域も教育委員会も一体となって取り組むという地域は、非常に教育効果を上げるところだと思うのです。それを作っていきたいなと思っているのですが、では同じ方向を向きましょうというだけでも大変なので、これはいろんな機会メッセージを絶えず発していかなければだめだなというふうには思っているのです。

○高橋市長 文武両道という、昔からよく言っているけれども、やはりスポーツと勉強は両立させてやっていくようにしないと、どちらも曖昧になってしまうのではないかなというものがあるのだけれども、そういうのを進めたほうがいいのではないかな。

○吉田教育長 スポーツ少年団訪問のときに、呼ばれていくときは、宿題やってねと言ってくれるとありがたいのですけれどもと言うこともあるのです。

○高橋市長 特に中学生、さっきも言ったけれども、時間を持って余していると、そういう子が結構多いという認識がどうもあるわけ。そういう子どもに、ある程度強制ではないけれども、宿題を出したりして、ちゃんとやってこさせる。クラブなんかでも一生懸命やって疲れているのだろうけれども、宿題はちゃんとやろうということで、有効な時間の使い方が身についてくるというふうに思うのだけれども。

○吉田教育長 これもやはり親御さんの……あるPTAの会合に出たときに、学年主任の先生がそこに来ていて、学年プラス1ですと言ったら、笑いが起きたのです。学年プラス1というのは、3年だったら4時間勉強しなさい、1年生だったら2時間勉強しなさいという意味なのですけれども、そのPTAの役員さんが集まった席でもそうなので、家庭での親の意識というのは結構大きい。

今日もある校長がつくづく言っていましたけれども、なかなか学力的には地域から見ると低い段階にうちはあるのだと、その校長は分析していたのですが、家庭学習をやらせてもだめだから、宿題をやらせないと、こう言っているのです。その辺も非常に考えつつ、学校現場は動いているなというのをつくづく感じたのですけれども、何が言いたいかというと、ぜひ応援してくださいということです。

○高橋市長 塾に行っている子は、先に行ってしまうと、宿題をやっても、もうわかっているなんていう子も結構いるような話も少し聞いたことあるのだが、その辺も先生の悩みの一つのところだな。

進藤委員さん、どうですか。

○進藤委員 先ほど市長さんがおっしゃっていたように、それぞれの家庭の親御さんの温度差というのも非常に大きくて、中学生ぐらいになると先ほど遊び場所というふうにおっしゃっていましたけれども、恐らく居場所というご趣旨だと思うのですが、確かにスポーツ少年団に入っている、あるいは塾に行く、そういった形で居場所のある子はそれなりに受け入れる場所があるのはいいのですが、例えば家庭の意識、関心が低い、かといってそういうさまざまな組織にも属さないで、居る場所がない。かといって地域コミュニティもはっきり言ってしまうと、今どんどん機能していない状況なので、本当にそこで大人の目とかいろんな社会の目が届かなくて、先ほどおっしゃっていたように落ちこぼれるという言葉は少し語弊があるのかもしれないのですけれども、本当に何していいかわからなくて、悪い仲間同士が集まってしまったり、あるいは悪い大人の誘惑に乗っかってしまったりということで、やはり家庭で何とかせいと言っても、現実にだめな

ところはだめなので、そこを何とかフォローしていかなくてはしょうがないのかなという気は正直、実際に非行少年なんかに接したりして、そのご家庭を見たり、あるいは少し問題児を抱えているご家庭のご両親様と接したりしたときには、少し感じるところは確かにごさいます。

○高橋市長 その辺が大きな課題だと思います。

○吉田教育長 子育連の会長は井橋さんと、昨日たまたまかるた取り大会があったのでお話をしてきたのですけれども、今度、うどん大使をやっている香川県出身の俳優を呼びたいというような話をしていたのです。この俳優さんは、子ども会活動をずっとやっていらしいのです。ですので、子ども会は減っていますけれども、何とかこれを進めていきたいというふうに取り組んでいる方もいらっしゃるのです、所管は子ども家庭部だと思うのですけれども、その辺も含めてやはり行政を挙げてそういう人たちを支援していくということも必要なのかなと。つくづく私どもも、あの川崎の事件で誰も助けられなかったみたいな、今、ちょうど判決が出たところですか、ああいうことがありましたけれども、そのときに子ども会のある人が、越谷市は大丈夫ですと、私たちが面倒見ますから、そういうのは出さないようにしたいというふうに思いますとかと言う方もいらっしゃるのです。だから、地域で子どもたちのことを大人がとにかくいろんな子どもたちに目をかけ、手をかけてくれると、非常に学校としても助かる。学校として助かるからやってくれというのではなくて、やはり子ども一人ひとりの成長にとってそれは欠かせないことなのだろうなというふうには思っているのです。学校だけで成長するわけではない。ちゃんと地域でも成長する。そのときにやはりきちんと大人が見ている。この辺をまさに図にしているのがこれだなと思っているのです。だから、これをやはり絵に描いた餅にしないで進めていくということが大事だろうというふうに思います。

今、進藤委員さんがおっしゃったのはそのことですよね。

○進藤委員 はい、そのとおりです。

○高橋市長 子ども会とか親の教育という、親のせいにする部分が多いのだけれども、事実そうだからな。親の教育が十分でないで、親が、子どもがやりたいというのを押さえるような時代が結構見受けられるから、状態がな。子どもがやりたいのを親がとめてしまうというのはけしからんと思うのだけれども、やはり親が仕事をやっているから、手伝いができないからとか、やはりそういう制約から子どもが入ると親がやらなくてはいけないということで入れない。

○吉田教育長 役員になるのがネックだということです。

○高橋市長 そういうところから社会教育、地域での育成というものをつくるのは難しい

よね。大きな課題だ、これは。学校は学校としての一つの館で先生がいるから、まだまだ大きな期待があるのだけれども、地域の場合は強制力がないから、これは困るのだよね。強制力をどう持ったらいいかというのは。

荒木委員さん。いろいろ感じていることがあるのではないですか。

○荒木委員 私もやはり皆さんと同じで、学校だけではなくて家庭とか地域とかで子どもたちを見守って育てていくというのはすごく大事だと思っております。

あと、この基本計画にありますよね。たくさんの学びの場というのがあるので、先ほど居場所がない子どもというお話がありましたけれども、例えば図書館ですとかミラクルだったりとか、私たちがやっているコンサートであるとか、いろんな居場所は、市としてはせっかくこれだけやっておるので、そういったものを果たしてそういう子たちが知っているのかなと今思ってしまったので、そういう子たちにぜひいろんなものに参加して、また自分がやりたいことを見つけてもらったりできたらなと思って、伺っておりました。

○高橋市長 知らない人は多いのではない。

○吉田教育長 そうですね。

○高橋市長 ミラクルだとかね。

○吉田教育長 広報に出していると言っているけれども、意外と見ていなかったりしますからね。知らない人がむしろ多いかもしれません。

○高橋市長 児童館だってあるのに、近くの人には知っているけれど、少し離れてしまうと、もう知らないのではないかな。

○荒木委員 児童館の近くに住んでいたという知り合いに、時間があるとそこに行って、すごくいろんなことを学んで育ったのだという話を聞きまして、ああ、そういう生活があったのかと。

○吉田教育長 ミラクルは、ある学年は全て行っていますので、これは子どもたちは全て知っている。

○高橋市長 子どもは知っている。3年生、4年生。

○吉田教育長 そうです。児童館となるとそういう取り組みはしていないので、それは知らない人が多いかもしれませんよね。児童館2つもあるというのは驚かれますよ。

その1つは、生涯学習とか社会教育と学校との接点をどういうふうにつけていくか、ある取り組みだと、例えばそういう地域にはこういう施設があるのですよと、こういうことができるのですよというのを10項目ぐらい挙げて、それを全部知っていれば、生涯学習認定証みたいのを出す取り組みで、学校と社会教育、学校と生涯学習とを融合させ

ていく、結びつけていこうという取り組みをしているところもあるのです。いろいろやることはたくさんある。まだそこには手をつけていないのですけれども。

○高橋市長 今、スポーツだとかサークル活動とか、私はやはり概念的な、観念的な言い方かもしれないけれども、指導者が絶対的に足りないのではないかというふうに思っているのだけれども、そうでもないかしら。

○吉田教育長 これは、永遠の課題です。

○高橋市長 スポーツとか文化活動、さまざまな活動があるのだけれども、そのリーダーをどうやってつくるかということが活性化を図っていく大きな課題なのだけれども、そのリーダーをどうやってつくるか。リーダー講習会とか年二、三回はやっているよな。だけれども、リーダー講習会をやって、その人が新しい種目に限らず、今度は自分がリーダーになってやりましょうと、この指とまれと声をかけてやるような人が全体的には減っているのではないの、増えているの。

○教育総務部長 少ないです。高齢化もありますし。

○吉田教育長 例えば子ども会が非常に普及していったときには、少年野球と少女ポートボール、これのチーム数たるや今の比ではないわけです。そこに一人ひとり指導者がいたわけです。ただ、専門的な指導者ではないのですけれども、地域のお母さんであったりお父さんであったりする人がやっていたのです。それから比べれば、今は随分減りましたので、そういう意味ではなくなっている。だから、そういうところが一番強みなのだと思うのですけれども、同時に、地域の人に指導を任せっ放しになると、中には一緒に持ちながら指導している人も昔はいましたので、質という問題も出てくると思うのですが、数的には減っています。

○高橋市長 なかなか、個々に挙げると、今言ったような問題もあるし、指導熱心な余りに強制的に指導したりして、トラブルを起こすケースもある。そういうのがピックアップされて、だんだんとリーダーが少なくなってくるとか、今は子どもが少なくなっているから、その子どもの奪い合いではないけれども、それがあって、かつては野球、今はサッカーという感じで、そのスポーツの分野も違ってきているでしょう。少年野球だと本当に地区ごとに10チームから20チームあって、進んでいたものがあったのだけれども、今は荻島地区は1つしかないと思った。昨日出ていたけれども、1チームだよ。そんなに数はないのではないかな。これは、一つの時代の流れだと言うには少し寂しい話だよな。

そういうリーダー研修会とか、リーダーを育成するための何か方策はないのか。

○教育総務部長 県の事業でも実施をしております、そちらのほうで受講した方がリー

ダーバンクに登録をさせていただいているのですが、なかなかその裾野が広がらないというのは実感はあります。なかなかそういった熱意のある方が少ないのか、それともいろいろ問題が起きたときに、矢面に立たされてしまうということを心配をしてなのか、理由はまだ余りわからないのですけれども、全体的に、例えばレク協にしても体協にしても、文化連盟にしてもそうなのですけれども、引っ張っていく人が、なかなかあらわれてこない、全体的に平均年齢がずっと上がっていつているというのはよく団体の方もおっしゃってまして、自分たちの組織の課題もわかっていながらなかなかその対応として、具体的に若い人を登用するとか、そういったところまではまだ行っていないというような状況です。

そういった意味では、処方箋というのはなかなか難しいのかなと思います。

○高橋市長 だんだんと減退してきたのは、私が今までいろんな耳にしたこと、見たことからすると、結局いろんな事故だとか何か起きて、責任転嫁されることがあるから、だんだんと減っている。俺はボランティアでやっているのに責任転嫁されてしまうと、やはりスポーツにはけがはつきものだから、つきものと言うと言い方おかしいけれども、あるのだよ、スポーツは。だけれども、それをもって指導者の責任にされたりするから、だんだんと指導者がいなくなってしまう。それと、ボランティアでやっているのだという、ボランティア精神がだんだん薄れてきたというものもあるのだけれども、やはり教育熱心な人と、言われたからやっているのだという人では全然違うからな。だから、その辺も問題意識はちゃんと持ちながら、どうやって進めていくかということが大きな課題ではないかな。

○吉田教育長 1つは、そういうリーダーバンクとかボランティア制度を広げていくというのと、もう一つ、市民大学でやっているような、いわゆる市民の方でノウハウを持っている方を、あるいは人脈を持っている方を人的資源として実行委員にして、そこで企画運営してもらおうというやり方をもう少し研究していく必要があるのかなというふうに思っております。

○高橋市長 もっと大胆に広く呼びかけて、そういう人材をつくる、組織ではないけれども、取り組み方というのを考えていかないと、自然発生的に待っていたのではいつになってもできないと思う。

○吉田教育長 そういうのを循環していかないと、やはり高齢化して団体として活性化できていかない状況になりがちなのです。今、少しそういう傾向が、現状にあるので、その辺は心配しているところなのですけれども、補充がもうきかない。循環していかない。ここだけがあつて、ここだけは高齢化していつてしまうということが、それから行政だ

けでやっている、やはりそれ以上広がらない。市長さんがおっしゃるようにネットワークをつくって、活動の輪をそこで広げていくというやり方をしていけないと、なかなか普及とか活性化とかというのにつながっていかないなど、これも課題ですかね。

○高橋市長 点を結んでネットワークにして、ネットワークになったところからまた面にして広がっていくやり方をとらなくてはいけないというのは、理論的にはわかっているのだよな。

○教育総務部長 教育長が今おっしゃいましたように、生涯学習フェスティバルは、教育委員会で企画立案をして、これまでやってきたのですけれども、2年前ぐらいですか、三鷹市のほうでかなり前から行政と民間の任意団体のほうでパートナーシップ協定を結んで、双方いいところを生かしながら、契約行為を行って、市民の意見をいかに行事に活かしてもらうとかというのがありましたので、それをお手本に越谷でも任意団体を立ち上げていただきまして、生涯学習フェスティバルの内容についてもそちらで考えていただくように切りかえています。まだ、去年で2回目、今年はたしか3回目あたりになるのですけれども、少しずつそちらのほうにシフトしていければ、お客さんを呼ぶときに、行政が来てくださいということよりも、そういう参画した任意団体の自分たちが企画立案をしている人が呼べば、私たちが考えたのだけれども、来てくださいということが、裾野が広がっていくと思います。行政がやるよりも非常に集客力が強いですから、それをもう少し生涯学習フェスティバルの中でももっともっと関係者というか、参画してくれる人たちを増やしていければなという取り組みを始めてきているところです。

やはり行政だけだとなかなか市長が言いますように限界がありますので、いいところは知恵として我々のほうにいただいて、そうやってやっていければなというふう考えています。

○高橋市長 限界と言わずに……

○教育総務部長 どうしてもやはり市役所が考えると、自分たちの知識の中でしか考えられませんから、事業のメニューからしても本当に市民ニーズに合った事業が提供できるかというのは、場合によってはタイムラグがあったりしますので、やはり若い人も、それから高齢の方もどういうふうなことを今講座なりやっていただきたいと思っているかというのを、その当事者の方々にいろいろ考えていただいて、メニューを決めていただくというのは、これは市民大学でもやっている話なのですけれども、そういう手法をもっともっと広げていけると、行政のひとりよがりになってしまうのかなと思いますので、そこは、まだ取り組み段階ですので、これから発展をさせていきたいと思っています。

○吉田教育長 教育行政方針の7ページにも書かせていただいたのですけれども、下から

7行目、ここに循環型生涯学習社会というのを記述していますが、学習活動を通して身につけた知識や人とのつながりなどを、これあえて入れれば人的資源として地域社会の活性化に生かしていくと、こういうようなのはさっき話題に出ているリーダーバンクであるとかボランティアであるとか、あるいは人的資源、こういうものをつくってくださいという市長さんからのお話もありましたけれども、そういうものと深くかかわって、さらには市民大学とか今言った生涯学習フェスティバルの取り組みのやり方を変えたところなんかは、こういう考え方に基づいて進めているということですので、この考え方は基本としてやはり進めていかなければいけないのだなというふうに思っているところなのですけれども、言うはやすしでなかなか行うはがたしで難しいところです。

○高橋市長 だから、呼びかけど呼びかけど反応なしというような状態もなくはないからな。そこのところは難しいのだけれども。

○吉田教育長 今回の市展なんかも頭打ちになっていたところなのですが、担当にも口酸っぱく言って、高校は9校あるのだから、そこへ働きかけろと、実際に行ったらしいです。高校生の出品作は倍以上出たのです。その中にも、見ていただきましたが、入賞者は出たのです。だから、やはりそういう地道な働きかけをしていくことだと思っているのですけれども、やはりそれにはそういうふうに職員自身が意識を変えていかないといけない。我々は、学校現場だったら教員の意識を変えていくとか、あるいは職場だったら職員の意識を変えていくとかいうことなのかなと、その基本になるのはこういう計画だろうというふうに思っているのです、これはばかにしてはいけません。

○高橋市長 これは大事なのだ。大事で、常に基本に戻るといえるのは、こういう計画があればこそ基本にも立ち返れるわけだから、それをどうやって具体化して実のあるものにしていくかというのが日常の取り組みですから。

○吉田教育長 頭が痛いところです。なかなか思うように進まなかったり、途中で頓挫してしまって、立ち往生するようなこともなきにしもあらずだから。

この次のテーマは。

○教育総務部長 その他ということで、施政方針と教育行政方針と予算とあったのですが、今議論の中では、その取り組みについての議論、協議をされていますので、あえてどうなのかなと、こちらだと個々の事業レベルの話も出てきますので、細かくなってしまうと、市長さんが言われている大局的なお話で今されていますので、その辺も議論されたのかなという気はいたします。

○吉田教育長 私の言ったことは全部言ってしまいました。言おうと思っていたことは、教育行政方針の中で、大丈夫です。

- 高橋市長 ぜひこの計画は計画でももちろん大事なのだけれども、その中で具体的に取り組んでいく教育課題というのは、おのずと何から取り組んでいったらいいかというようなことは出てくるわけだから、全てができればそれにこしたことはないけれども、金もかかる話にもなるし、人を教育していくということになれば、その人の感覚もちゃんとわきまえていかなくてはいけないわけだから、一概にここだけで話をしているわけにはいかない。あとは現場でいかに理解を深めてもらうかということに尽きるわけですから。だから、いつも私は、先生方にしっかりと理解してもらいたいと、そこに尽きるわけだからね。先生も今1,400人、1,500人。
- 吉田教育長 約1,400人です。大体20人に1人で今2万7,000人ですから、本採用だと1,350人、非常勤とか入れると1,400人ぐらいですか。
- 高橋市長 越谷は子どもは全体的には減ってきている。
- 吉田教育長 微減です。
- 高橋市長 微減だよ。だから、まだまだ十分対応していける課題があるから、いわゆる過疎とか何かの問題には。地域によっては若干過疎問題もなくはないので、市内農村部は過疎化している。
- 学校教育部長 新方と増林ですね。
- 吉田教育長 そういう適正配置、適正規模に関しては、20年、30年先に大きな課題が出てくるだろうと思っていますけれども、とりあえずのところは学区の調整はしていただくだけです。
- 高橋市長 蒲生、川柳のほうの学区は大体落ち着いた。
- 学校教育部長 はい。28年4月から入れてほしいというお子さんがもう新1年生で15、6名で、上の学年も8名、9名出てきていますので、もうこの4月から20数名蒲生小に行かせてほしいという希望が出ていますので、大丈夫かなと。
- 高橋市長 なかなか画一的には難しいから。
- 学校教育部長 順次になりますけれども……
- 高橋市長 弾力的に運用できるものは図ってもらって、とにかく新しく施設をつくると、片方はスクラップでだめです、やめますよというわけにはいかないのだから、そんな予算の対応は難しいわけだから、柔軟に再編成をしてもらって、有効に施設を活用してもらわないと、なかなかやっていけないものだから。
- 吉田教育長 これについては、学区審の答申と市でつくった施設管理計画、これはかなり有効だよ。
- 学校教育部長 そうです。やはり私たちもバックボーンというのを持っているものです

から、説明もしやすいというふうには思っています。

- 高橋市長 そういう意味ではタイムリーだったのかな。
- 吉田教育長 ああいうのを出示してもらって、市民の方も一様に理解はしてもらっているようなので、さっき言ったバックボーンというのは、その学区審の答申とその施設管理計画、それですので了解は取りつけやすかったかなと、当初は大変焦っていましたので。
- 学校教育部長 公共施設を22%減らさなくてはいけないのだとかという話はさせていただいたのですが、広報でも出ていましたよねと……
- 高橋市長 やはり将来展望を踏まえて対応しないと、100万円や200万円の話ではないのだから……
- 学校教育部長 50数億円と言われましたので、少しそれは難しいということはもう説明されました。
- 高橋市長 3点セットで20億円にはできないだろう。
- 学校教育部長 50数億ですね。
- 高橋市長 敷地を買ってつくると言ったね。
- 学校教育部長 敷地を足したら58億円。
- 高橋市長 1校つくるといったら、それだけかかるのだから。
- 吉田教育長 レイクに学校建てる、そんなことしなくていいよと言われました。
- 高橋市長 しばらくは何で레이크に学校がないのだと言われてしまうけれどもな。
- 学校教育部長 でも、この前の説明会では、これだけかかるので後世にその負担は残せませんと話したのですけれども……
- 高橋市長 周辺は逆に減少傾向に入っていたのだからな。それを今の施設を有効に活用するというので、ご理解は願うしかないものな。
- 学校教育部長 残念ながら恐らく数十年たつと、急激に減ると思うのです、あの地区は。団地と同じだと思っているのですけれども……
- 吉田教育長 それもよく知っていますね、そういうふうに言った方は。一時増えたところは一遍に減るというようなこと。そういう情報を小まめに流すのが有効かなと思いました。
- 高橋市長 時代の流れはやはり客観的に的確に把握しながらやっていかないと、説得力が欠くことになるからさ。

それでは、この後、特にもうこの計画については、皆様のご意向を最終的に伺いし、決定したいということについてはよろしいでしょうか。

〔「はい」と言う人あり〕

○高橋市長 それでは、基本計画案については、この原案で決定をさせていただきます。

そのほか何か皆さんからございますか。

○事務局 特に事務局のほうからありません。

○高橋市長 特にはありませんか。

では、以上で今日の総合教育会議終わりにしてよろしいですか。

〔「はい」と言う人あり〕

○高橋市長 以上で第3回目の総合教育会議を終わらせていただきます。

どうも長時間ご苦勞さまでした。